

あるむぜお67

府中市郷土の森博物館だより

a | museo NO. 67

2004年3月20日

鯉のぼりと

五月晴れの空

目次

- 1-2 鯉のぼりと五月晴れの空
- 3 プラネタリアムの舞台裏
メイキング オブ 春の新番組
- 4-5 ノート ケヤキ並木の「埒はない」話
- 6 民具発見 ④思い出、伝承なき民具の見かた
- 7 最近の発掘調査
熊野神社境内で上円下方墳を発見
- 8 たまRIVER WARS ④決戦は白丸ダム

風薫る五月、さわやかな五月晴れという表現をよく使いますが、これは五月雨とともに日本の気候の特徴を言い表しているものです。さつきの語源は一説には早苗月からといわれ、実は田植えの季節に由来するものと考えられています。旧暦の五月は新暦のほぼ六月にあたり、その季節に降る雨を五月雨と呼び、語源はさつきの水垂からといえます。従って、五月晴れは梅雨時にめずらしい束の間の晴天を表現したもので、決して新暦五月の青空のことではなかったのです。蛇足ですが、旧暦六月を水無月といいますが、実際は新暦七月の日照りに由来するもので、雨の多い六月がどうして水の無い月なのかこれでわかるでしょう。七夕もしかり、新暦の七月七日ではまだ梅雨があけず、星も見えないことがよくあります。一カ月後の真夏の夜こそ星を見るには絶好の季節になるのです。仙台の七夕祭の開催が八月上旬であることは、非常に理にかなったことだと思います。話が太分それてしまいましたが、五月五日の晴天は本当なら春爛漫の卯月晴れといった表現が正しいところでしょう。いずれにせよ、ほとんどの場合、五月晴れは新暦の五月の晴天を指しています。国語辞典にも本来の梅雨晴れの意味と同時に五月の晴天の意味も載っています。ですから頑固に否定することもできませんが、本来の言葉の意味を知っておくことは必要です。博物館で行う年中行事の再現も、たとえばプラネタリウムで七夕を題材に特別投影を行ったり、ロビーに短冊いっぱい**の笹竹**を飾るのは、本来八月である方が親切な**の**かもしれません。こうした行事が四季折々の気候と密接に関係することを伝える使命を第一と考えれば……されど、世の中の習慣にはなかなか逆らえないのが現実……妙に時期外れに思われてしまうのでしょうか。

さて色々と意見を並べてはみたものの、世間一般でいう五月晴れに合わせて話しましょう。五月といえば五月晴れのもと悠々と泳ぐ鯉のぼりを連想しますが、これは端午の節句と呼ばれる年中行事のひとつ。端午の節句の起源は奈良時代からと伝えられていますが、もともと端午とは月初めの午の日を表し、特に五月に限ったことではありませんでした。午と五の音が同じなのでそのうち毎月の五日を指すようになり、果ては五月五日を示すようになったといえます。当時の五月五日には、病気や災厄をさけるための行事が行われ、菖蒲を飾り、皇族や臣下の人びとに蓬などの薬草が配られたそうです。こうした朝廷の行事は鎌倉時代に入って廃れていきましたが、武士の間では武士を尊ぶ気風が強く、その意を表す「尚武」と「菖蒲」をかけ

て、端午の節句を尚武の節日として祝うようになりしました。

やがて江戸時代になると、五月五日は徳川幕府の重要な式日に定められ、大名や旗本が式服で江戸城に出仕して将軍にお祝いをのべたといえます。また、将軍に男の子が生まれた時には、表御殿の玄関前に馬印や幟を立てて祝いました。端午の節句が男子誕生の祝いへと結びついたのはこのあたりからなのでしょう。やがては一般大衆にもこの行事は浸透し、最初は玄関前に幟や吹流しを立てていましたが、そのうちに厚紙で作った兜や人形、紙や布に描いた武者絵なども加わって、ついに江戸時代の中頃には武士の幟に対抗した鯉のぼりが登場したのです。“鯉の滝のぼり”を立身出世の例えにしたものと考えられます。



博物館に展示された武者人形・幟

時代は変われど、五月五日の端午の節句は、年中行事のひとつとして受け継がれています。都会では大きな鯉のぼりを掲げる家も少なくなりましたが、地方に行けば結構立派な代物も目につきます。大きな庭でもない限りは難しいことですが、そこは広いスペースのある博物館、毎年復元農家の庭先に天高くたなびく鯉のぼりを楽しむことができます。いわゆる五月晴れの空にひときわ目立つ鯉のぼりは、男子の節句にふさわしい力強さと大らかさを象徴しながら、季節の風物としても欠かせないアイテムです。こんな世の中ですから、鯉の滝のぼりにあやかって、ひとつ景気が回復するように願いをこめて見上げてみるのも一興かと……

参考文献

季節おもしろ事典 倉嶋厚 東京堂出版
 行事の歴史学 遠藤元男・山中 裕 弘文堂
 年中行事辞典 西角井正慶 東京堂出版

プラネタリウムの舞台裏

～メイキング オブ 春の新番組～

みなさんが普段何気なく見ているプラネタリウム番組はどのようにして作られているのでしょうか？番組の作り方は、大別すると以下3つの分類になります。

- 1、全ての作業（企画立案、脚本執筆、資料や映像素材の収集、音声の録音、ドーム内への据付など）を館の職員が行う。
- 2、企画（または脚本まで）は館の職員が行い、他の作業は番組制作業者へ委託。
- 3、番組制作業者が所有している既存の番組から選択。

但し、全国には大小合わせて約350に及ぶプラネタリウム館があるので、その全てがこれに当てはまる訳ではありません。また、季節により客層や観覧者数が顕著に変化する館や制作予算をやり繰りする必要がある館は作り方を使い分けたりもするのです。当館では年間4本の番組を制作し季節ごとに内容を入れ替えています。この数年間は前述の2と3の作り方を組み合わせていますが、他のプラネタリウム館と共同制作を行うこともあります。ここでは2の方式を使って、当館が他館と共同で制作し、春番組として投影する「天空の天文台 マウナケア～遙かなる銀河の世界へ～」の例を挙げて紹介いたします。

共同制作を行う目的は、複数館の担当者が集まり知恵を絞って「質が高く分かりやすい番組」を作ることです。また、制作費の一部を各館で分担することが出来るため、単独で同じ内容の番組を制作した場合よりも少しだけ安価になるメリットもあります。しかし、全国のどこの館とでも共同制作が出来る訳ではありません。それぞれの館で投影に使用している機器の仕様が同等であることが前提となります。なぜならば、同じ番組にも関わらず演出方法に違いが生じ、観覧者へ伝えたい番組のテーマが十分に表現できないからです。

例えば、CGを動画で映写したい場合ではビデオプロジェクターの有無が必要条件になると言った具合です。また、各館での客層が大きく違ったり、説明が難しい現象や専門用語をどのように噛み砕いて例えるかなど、脚本の言い回しを変えなくてはなりません。これでは、脚本の書き直しや録音と編集に余計な経費がかかることになり、共同で制作する意味がなくなってしまうのです。

今回の春番組では、共同制作で長年の実績を持ち成

果を上げている群馬県生涯学習センターと新潟県立自然科学館に当館が合流する形で制作を進行させました。群馬県生涯学習センターの担当者が資料を収集し企画を立て、番組制作業者がその企画に合わせた脚本を書き、それぞれの館で内容の検討を行いました。ストーリーは、星好きなお父さんが家族をハワイに連れて行き、マウナケア山で日本の「すばる望遠鏡」などの天文台群を見たり、銀河にはさまざまな種類があることを知る、という展開です。脚本を読み込んだ上で、映像の追加要望



「すばる望遠鏡」によるM82銀河 国立天文台

や演出および内容変更などは小まめにEメールでやり取りしました。共同制作は「3人寄れば文殊の知恵」ではありませんが、ひとつの脚本をさまざまな視点で客観的に見ることができ、新たなアイディアや演出方法も加えることが可能となります。この番組でも「マウナケア山にある各国の天文台群」と「天文台が撮影したさまざまな銀河の形」のどちらの紹介に重点を置くのかを検討しました。また、番組制作業者と交渉した結果、当初は予定されていなかった動画のシーンも加えることになりました。限られた制作費の中で、制作費以上の物を作り上げるには、各館の担当者が番組作りにどれくらいの熱意を傾けられるかにかかっているのです。

(馬場弘修)

プラネタリウム春の新番組

「天空の天文台 マウナケア～遙かなる銀河の世界へ～」

投影期間：2004年3月20日（祝）～ 6月13日（日）

平日 14:00 15:30 日・祝・春休み 11:00 14:00 15:30

お見逃しなく！

大国魂神社（六所宮）大鳥居前から旧甲州街道をはさんで、まっすぐ北へ600 mほど延びるケヤキ並木は、府中の人々にとって切っても切れない程身近な樹林になっています。その姿や色の変化で季節のうつろいを感じていると言っても過言ではありません。これから5月のくらやみ祭りの頃へ向けては、さわやかな風の中に若葉が芽吹き、春の訪れの喜びが街を包みます。

今年は、1924年（大正13）にこの並木が「馬場大門ノ櫛並木」（現在は「馬場大門のケヤキ並木」と表記）の名称で国の天然記念物に指定されてから80年目にあたります。櫛並木とはともかく、馬場大門という名はどこからきたのでしょうか。

大門と東西馬場

大門は、文字通り大きな門を指すのですが、この辺では、建物が表通りに面してあらず引っ込んである時に、通りから建物に到る通路のことと呼びます。

馬場の方は、その大門にあたる中道の両側にあった、徳川家康が六所宮に寄進したという東西の馬場2筋のことです。ですから、言葉どおりに解するなら、「馬場大門」は馬場と大門で、3筋の通りを指さなければなりません。

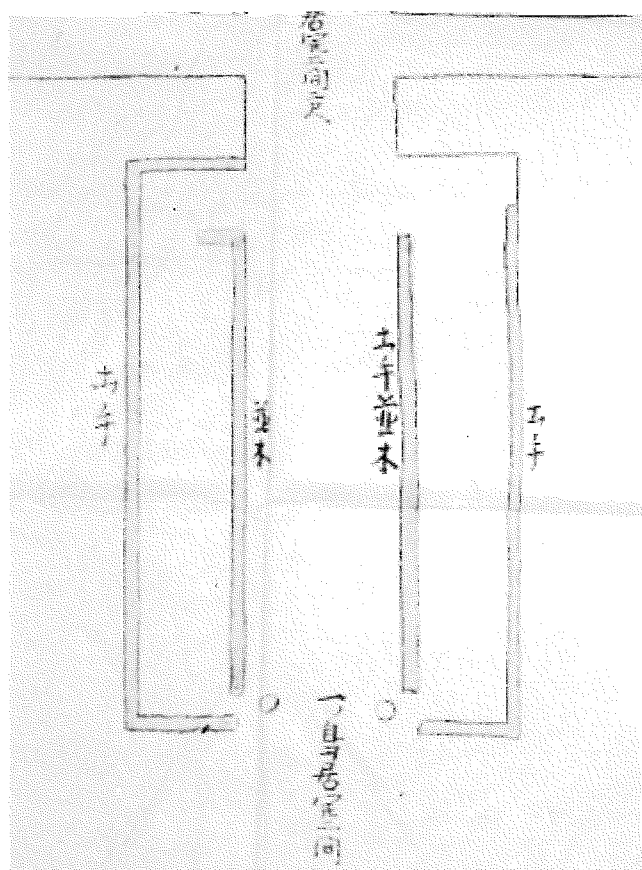
古い神社には今でも神馬^{しんめ}がいたり、神馬舎が残っていたりしますが、神社に馬は付き物でした。有名な京都賀茂神社の競馬、鎌倉鶴岡八幡宮の流鏑馬などに見られるように、付属の馬場で馬を駆けさせることが奉納神事の一つでもありました。

六所宮の馬場は、江戸時代の後期に書かれた神社の縁起によると、元は甲州街道の南側の境内の東西にありましたが、新しい馬場が北側に出来たので、旧地は神主や社人の屋敷地としたとあります。この名残が、現在でも「細馬^{ほこま}」「駈馬^{かば}」と呼ばれている境内を挟む両側の道だそうです。

馬場の形状

家康寄附の馬場の形状については、江戸時代を通じて基本的な土地台帳である延宝6年（1678）検地帳に、馬場中道は南の町並み（甲州街道）から北の一の鳥居までの長さ345間、横幅が南で4間2尺、中と北では5間1尺、西馬場と東馬場の南の馬留土手から北土手までの長さは、それぞれ268間と280間、横幅は西馬場が4間5尺～4間、東馬場が6間、さらに馬場には土手が有って、その高さが西は平均3尺5寸、東は平均5尺と記載されています。

これより以前の数字としては「慶長11年（1606）御造営ノ図 御社頭古絵図」（『府中市史』p. 626所載）の付記がありますが、こちらでは馬場の長さは東西とも4町50間、横



「慶長年中 権現様御建立地方絵図面」（部分）

は共に5間で、高さは記されていません。中道については南で広さ6間、北方では3間半とだけあります。

両者の数字を信用できるものとした場合、違いの理由として考えられることは、この間に火事で焼失した六所宮の再建工事が寛文7年（1667）に幕府によってなされたことです。この工事後に大鳥居前の甲州街道際に立てられた制札には「馬場土手に植之苗木めき採るべからざる事」という1条があるので、馬場にも何らかの手が加わったと考えても無理は無いでしょう。

さて、その土手の形については、大国魂神社文書の中にあるいくつかの境内図に見ることができます。上に挙げたのは、おそらく後年の写しとは思われますが「慶長年中 権現様御建立地方絵図面」と表題の付けられているものです（方位は上が南）。この図では一番西側の土手の南側はまっすぐ止まっていますが、別の慶長造営図の写しとされる絵図や、文化2年（1805）の年紀の入った図などでは、この部分は内側の土手より北方で鉤型に東へ折れています。

いずれにしる南北の4本の土手で区画される3つの通りが示されて、中道の南北両端の外側を回り、東西馬場を

しゅうがい
周回出来る形が分かります。

また、これらの図には微妙な違いがあります。4本の土手の付記として「並木」の語が全てにあるものと、内側2本だけのものとがあるのです。

「埒はなし」

六所宮の馬場については、府中を訪れた人たちの記録にも散見されます。村尾正靖の著した文化9年(1812)刊『江戸近郊道しるべ』別名を『嘉陵紀行』と言う地誌にこんな記載があります。「……一ノ鳥居のかたに行、左右みな、けやき、榎の並木五丁斗り、うちにけやきの古木幹自らくちて、うつほなるが五六株あり……、左右の馬場は、神祖寄附ましますと云[埒はなし]、この一の鳥居の……」(神祖とは家康のこと)

私たちが普段「うちもない」と言うのは「しょうもない」とか「くだらない」という意味の時なので、初めこれを読んだ時、私はこの個所を「馬場を家康が寄附したなんて、そんないいかげんな伝説を云って……」と解していました。そして、御三卿の一つである清水家の家臣である彼が、こんな切って捨てるように家康由来を否定するなんて、勇気があるなあと思ったのです。

でも念のため辞書を引いて自分の知識のそこそこの無さに赤面してしまいました。「埒」とは低い垣とかさかいのことで「馬場の周囲の柵」とありました。そう言えば競馬の絵でよく例に引かれる『年中行事絵巻』でも、馬を

駈けさせている場所を区切っている背の低い木製の柵が描かれています。村尾正靖は、馬場につきものの「埒」がここには無いとメモしていたのです。

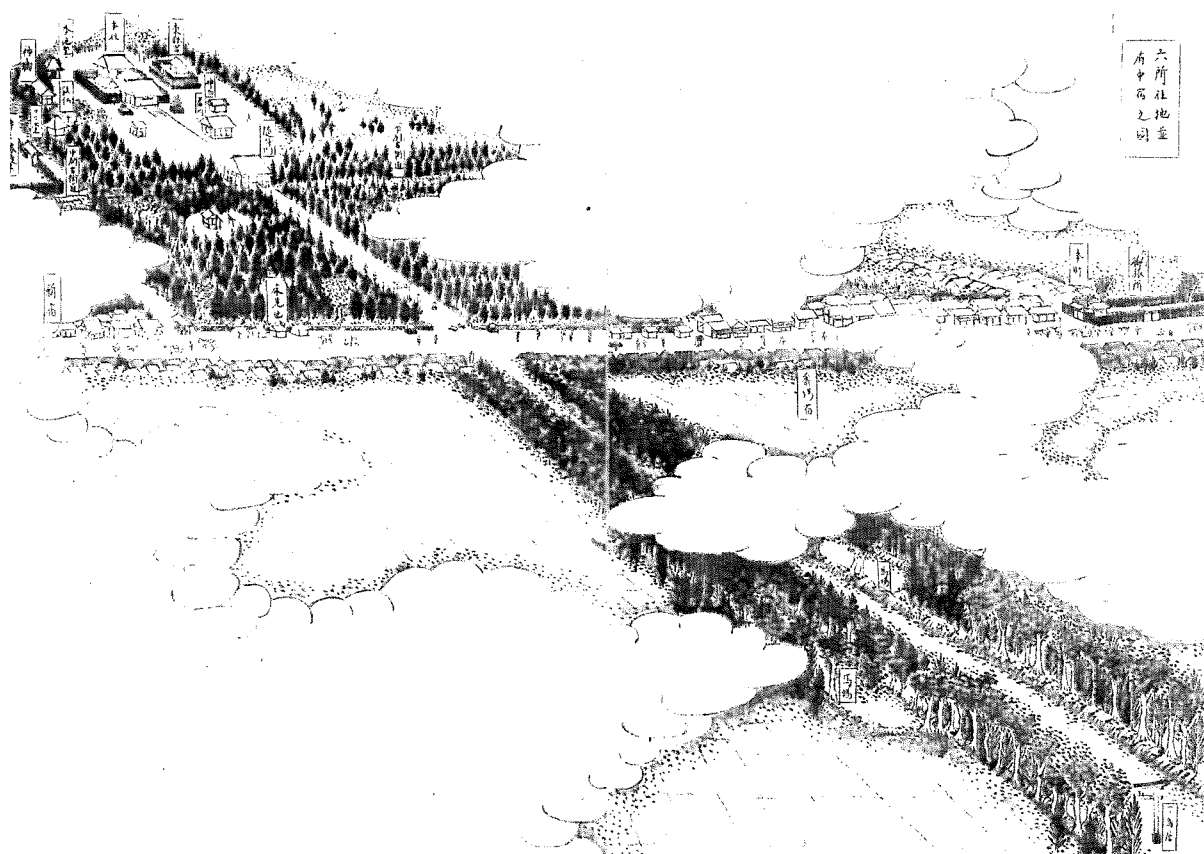
六所宮の馬場に埒が無かったのは、土手が柵の替りをしていたからでしょうか。ただ、一概にそう言いきれないのは、『江戸近郊道しるべ』には図が付いているのですが、そこに外側の土塁は全く描かれていないのです。

並木は何列？

現在、馬場外側の土手は跡形もありません。いつの頃から崩されて平らにされたはずなのですが、その時期について『江戸近郊道しるべ』の例は一考に値します。

しかし一方で、下図のような絵もあります。これは江戸後期の地誌類のうちでも多くの人々が最も信頼を寄せる『新編武蔵風土記稿』(影写版)の挿絵です。風土記稿は幕府の威信にかけて綿密な実地調査を行い、文化7年(1810)に起筆して、天保元年(1830)に上程されたとされます。これを見ると馬場外側の土手にも植樹がされて、明らかに並木は4列あるのです。これを単なる想像図とする根拠は見つかりません。

4本の土塁は全てが樹列だったのか、内側だけなのか、土塁が壊されたのはいつなのか、府中の人たちが毎日見て来たケヤキ並木にもまだまだ謎はたくさんありそうです。



『新編武蔵風土記稿』の挿絵「六所社地並府中宿之図」

民具発見

佐藤 智 敬

第四回 思い出、伝承なき民具の見かた

民具は視点によってゴミにも神にもなりうる、と前回述べました。とはいえこの考え方、万能であるとはいえません。モノについての思い出や伝承が聞けることが大前提の視点だからです。「思い出や伝承は客観的でない」という指摘以前に、博物館にもたらされるモノは、伝承者が絶え、追跡困難な場合が圧倒的なのです。そこから民具を発見する視点を得るかは、日頃からの勉強や比較、観察が不可欠です。そんな問題に直面した経験から、今回は思い出や伝承なき民具について考えてみようと思います。

2002年4月、府中市白糸台に建っていた鍛冶屋さんの小屋が取り壊される、という情報もたらされました。この小屋の以前の持ち主は、野鍛冶と呼ばれ、鋤や鋤、農耕馬の蹄鉄などを注文に応じて製作、修理することで生活していたようです。その方は博物館内のふるさと体験館で鑑賞できる記録映画にも登場する鍛冶屋さんでした。自分で作った鋤をつかい土を耕す姿を、今でもブラウン管越しに見ることができます。

小屋自体滅多にないものだったので、寸法、間取りから内部に残っていた道具その他について白糸台にあった鍛冶屋小屋（写真上）と2003年特別展における鍛冶屋道具展示風景（写真下）をめぐり、大掛かりな調査をすることにしました。博物館ボランティア資料整理班の助けも借り、2日かけて道具や機械を分類し、鍛冶屋小屋からは道具もゴミも、鋤の刃も、大型の回転式砥石（グラインダー）も、鍛冶屋の神様（金山様）を祀っていたらしき祠（と我々が認識したもの、ただの箱でない証拠はない）もいただいてきました。登録総数337点。建物や風景以外はほぼまるごとです。本当なら建物ごといただいて移築展示でもできれば一番いいわけですが、なかなかそういうわけにもいきませんから…。

さて受け入れてからが大変です。その大半が鍛冶屋さんの小屋に残されていたものという以外、よく分らない。鍛冶作業をするための道具？造られた製品の一部？材料？ゴミ？鍛冶屋の仕事について教えてもら

うにも、もはやこれを使用していた人は故人…。ほかの鍛冶屋さんに講師に来てもらって多くのことを教えてもらう事ができましたが、定まった鍛冶屋業の型があるわけでもなく、独自の方法で仕事をしてきた鍛冶屋さんの全貌を知るには至りませんでした。

実はこうした問題はよくおこります。博物館に「珍しい、古い道具がある」と連絡をいただいて行ってみると、たしかに古く、珍しそうな道具がある。ところがそれを購入、製作、使用した人はもはやおらず、改築や物置の整理の際に偶然にも発見され、「なんだかわからないけれど、捨てるのであれば博物館に」という場合が多いのです。

こうしたモノに対してはどのような追求ができるのでしょうか？詳細がわからなくとも、目的が「モノそのものに美的価値を見出す」場合、それは「民芸」を見る視点とされます。また、「モノを通して人を知る」場合には「民具」を見る視点です。この視点が重要です。そこから記されている文字や形状、用途の比較分析などができます。

その意味で、鍛冶屋さんの道具は鋤の種類から耕作物を知り、近隣の農家がいかに関農具を整備していたのかを知るためにも貴重な資料です。

鍛冶屋小屋の道具類は、2003年夏には特別展「昔の道具展 思い出、伝承」にその大半を展示しました。不思議なことに、展示会場で一堂に会

してみると、用途こそ不明でも、鍛冶屋さんが作業をしていた小屋の雰囲気を追体験しているような気分になりました。まるごといただいたことでかつての姿をある程度復元でき、その景観から鍛冶屋さんのいる風景があたりまえだった暮らしを理解できたのかもしれませんが。鍛冶屋さんの道具は、人々が使用するモノを造っていた職人の痕跡で、府中の農業事情の一側面をうかがう民具群ともいえるでしょう。

また、鋤を修理してもらった経験、小屋のある風景、鋤を打つ響きなど、鍛冶屋さんのいた頃を記憶している人にとっては、間接的な思い出のある民具といえるのかもしれませんが。このように、必ずしも直接的な思い出や伝承を通さずとも民具は発見されうるのです。



白糸台にあった鍛冶屋小屋（写真上）と

2003年特別展における鍛冶屋道具展示風景（写真下）

熊野神社境内で

上円下方墳を発見

西府町2丁目 府中市遺跡調査会 紺野 英二



石室の入口部分

今回は、西府町で発掘調査された“武蔵府中熊野神社古墳”を紹介します。この古墳は、本誌36号（1996年）で横穴式石室をもつ古墳である可能性が指摘されていました。そこで、昨春から熊野神社・氏子会の協力のもとに、古墳の保存を目的とした確認調査を行いました。

古墳は、府中崖線（ハケ）から立川段丘面に500m程入ったところにあります。周辺には、国立市の下谷保古墳群や府中市の高倉古墳群と呼ばれる古墳時代後期から終末期（1,500～1,300年前の時代）の群集墳（小さな古墳のまとまり）が確認されていますが、熊野神社古墳は、これらの古墳群から700mも離れたところに単独で造られています。

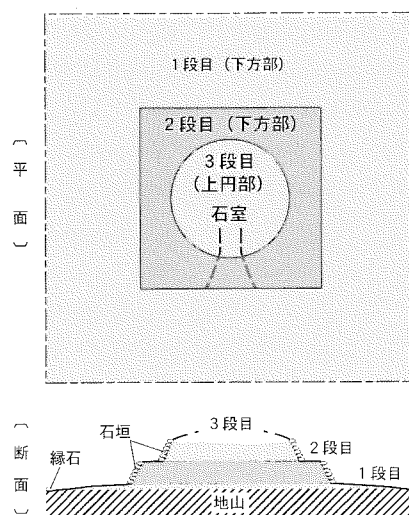
古墳の形は、上部が円形、下部が方形の“上円下方墳”と考えられます。この“上円下方墳”は、全国でも非常に珍しいもので、発掘調査で判明している例としては奈良県「石のカラト古墳」（7世紀末）と静岡県「清水柳北1号墳」（8世紀初）が知られているだけです。

石室などの埋葬施設は、凝灰質砂岩の切石を用いた横穴式石室の入り口部分が確認できました。石室内部はまだ未調査ですが、入り口に取り付く南側には「ハの字」形に開く、河原石を積んだ墓前域（葬られた人のお祀りなどをする場所）も確認されています。

残念ながら今の時点では、この古墳が造られた年代を示す遺物は出土していません。しかし、この古墳が造られたのは、およそ7世紀代（1,300～1,400年前）と推定してよいでしょう。

それでは、こうした古墳が府中で見つかったことに、どのような意味があるのでしょうか？ 古墳の造られた7世紀代は古墳時代終末期と呼ばれ、全国的に“前方後円墳”が造られなくなった時期です。この時期、関東地方ではおもに“方墳”や“円墳”が造られ続けていました。先ほど紹介した高倉古墳群でも確認されているものは、すべて円墳です。これらの古墳は墳丘や埋葬施設の規模が小さいものばかりです。それに対し熊野神社古墳は地表に盛り土をした上に切石を用いた石室を構築していることや、“上円下方墳”という特殊な形をとることから、群集墳に葬られた人々とは異なる階層の人が葬られたと考えられます。

武蔵府中熊野神社古墳の調査は今後も行われていく予定です。石室はどのような構造で、いつごろ造られたのでしょうか。またどのような身分の人が葬られたのでしょうか。今後の調査が楽しみなところです。



墳丘の模式図

たも RIVER WARS

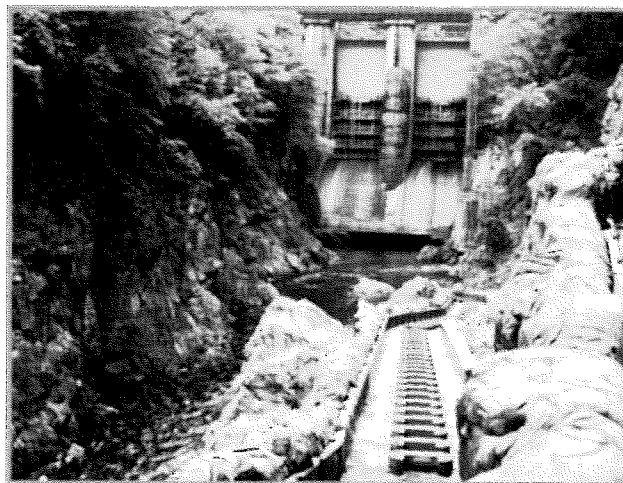
④ 決戦は白丸ダム

中村武史

「よく3人だけで乗り越えてきたね、エライエライ」半べそ^{はんべそ}のセイコ^{セイコ}の頭をなでながら聞くエノキンの声はとても懐かしく思えた。「ところ

で一体どうしたって言うんだ、心配していたんだぞ、急に消えちまうんだからな」タウ工が少々興奮^{こうふん}気味に問いかけると、待ってましたとばかりにエノキンが反応する。「いやあ、思ったよりボスザルはでつがいぞ！ 森の中を追いかけたけど、木立に紛れることなく一発でわかるほどの大物だよ敵は。さすがに動きは素早いんで、この湖のやや手前で見失ったけど…」「あんまり単独で動くなよ、信じちゃいるけど万が一ってこともあるよ」タウ工が釘をさしたところで日もとつぷり暮れてきた。「どうするの？ 今日はもう帰れない？」セイコはすでに超ブルーである。「あの源流神^{げんりゅうしん}の言ったこと

は本当だったわけだし、乗りがかった舟^{ふね}だから降りるのもしゃくだしさ、セイコ、ここはもうちょっと頑張ってみないか？」エノキンの穏やかな口調は不思議と周囲を安心させてしまう。おまけに段取り上手と言おうが用意周到と言おうか、メンバーの家族にはすでに連絡を入れ、了承を得ているとのことだった。さらにとどめは野営用のテント一式と寝袋、そしてアウトドア用の簡易食料が調達してあったのには驚きだった。何でもエ



白丸ダム・右手前は魚道 撮影：上田大志（多摩川センター）

ノキンが所属するボーイスカウト仲間がこの近くにいますのぞうだ。奥多摩湖^{おくたまこ}に着く早々、借りてきたらしい。「さあ、ここにテントを張ろう、ほらそこに温泉もあるんだぞ」

奥多摩湖…奥多摩の山々に囲まれた東京の水がめ。小河内^{こがわうち}タムの完成により誕生した人造湖である。タムの上流域に降る年間約1600mmの雨が丹波川^{たんぱがわ}、小菅川^{こすけがわ}などの多摩川支流に流れ込み、はるばると運ばれて来る。周囲は春の桜、夏の深緑、秋の紅葉、冬の雪景色と水源林の四季の変化が手に取るようにわかる美しい場所。そんな湖も小河内村を沈めて造られた過去があった。「でね、昭和6年に東京府の計画が村に伝えられてさ、住民の大半が移転することになるんだけど、タム建設は順調じゃなかったんだ。昭和13年によやく工事が着工したらすぐに戦争が始まり再び中断、再開したのは昭和23年さ。14集落945世帯を水没させて昭和32年に世界有数のダムとしてついに完成、ずいぶん工事の犠牲者も出たらしいよ」テントの中でエノキンの話は続く。「村から移転した村民は農業に変わって林業や観光業に活路を求め、働き場を確保して過疎を止めようとしたんだ…でも中々うまくはいかなかったみたいだけど…ほら、さっき行ったその鶴の湯温泉…そんな村人の希望で蘇った600年以上も歴

史のある温泉なんだって。水道局がわざわざ湖底から汲み上げる施設を造ったんだぞうだ」2時間に及びエノキン教室も、すっかり夜が更けたので全員就寝となった。静かな闇に包まれた実に神秘的な夜、温泉上がりの体には睡眠に1分とかがらなかった。

翌日も快晴であった。夏の日光が照りつける厳しい川下りが再開するのだ。タムが障壁^{しょうへき}になっているので、4人はイカダを抱えて道を歩き、タムの下にある発電所に沿ったところから本流に戻った。この先は惣岳溪谷^{そうがくせいぐ}、またしばらくは谷谷^{たに}の急流に身を任せることになるが、今度はエノキンも合流したので勇気百倍、本日はさすがにセイコも笑顔でスタートと相成った。だが1人だけ…ハニーだけは昨夜から何かを思いつめた表情だった。それがどのような理由によるのかはこの時点で定かではない。動き出したイカダの上で突然エノキンが雄弁に語り始めた。「俺は昨日みんなと会う前に、地元の子供と話をしたんだ。この先の溪谷でよく釣りをするらしいんだが、釣った魚を大ザルに横取りされたっていうんだよ。やつらはこの先に必ずいる！ 俺には絶対に決着を付けたいと思う場所があるんだ。俺は叔の姿を一度見て知っているから考えたんだ。流れの急な所は俺たちに不利だから、川の流れの一旦止まる所、そして高低差のある所が有利だと思う。つまりは白丸タムだ！」「ああ、最近魚道が整備されたあのタムね」久しぶりにハニーの発言。「そう、魚道を遡る魚に手を出すかも知れない。遡上の妨害は闇の意志でもある

だろうし…ここを決戦場にする！」力強いエノキンの声に一同考える間もなく作戦を受け入れることになった。惣岳溪谷を抜けた所に白丸ダムがある。多摩川には小河内から下流に向けてタムや堰が所々に設置されている。遡上する魚にとってはこれが大変やっかいな代物だ。そこでこれを助けるために魚道なるものをこしらえてさらに上流へと繋がる道を通している。いわば川におけるバリヤフリー措置なのである。エノキンの計画では、タムの上からネットを構え、ボスザルが魚を捕りに現れたら捕獲、川岸で待機するエノキンが押さえ込むという極めて原始的なトラップであった。ボスザルが捕まればその他一派は戦意喪失するであろう推測のもとに考えられたものだが、存在感の強大なボスだという実感を持つエノキンならではの確信に近い作戦なのだろう。もはやターゲットは絞られたのである。

他の3人も当然必死であり、あまり細かいことを思考する余裕は無かったわけだが、それでもあの冷静なハニーだけは、頭の中で糸がもつれる感覚に襲われていた。「何かがおかしい…でもその何かがわからない…この不思議な違和感は一体??」

つづく